

地域の山と地域の建築をつなぐには



パートナー名:とちぎ木づかいプランナー協会

30班 コミュニティデザイン学科 内田順也
 建築都市デザイン学科 岩田真菜 松井瑞樹
 社会基盤デザイン学科 谷本靖斗 最上拓海

背景

現在、国産の木材の多くは60年という伐採期を迎えており、これ以上放置すると木材としての質も落ち、二酸化炭素の吸収量も落ちて環境にも悪いという問題が起ってしまう。そのため、計画的な伐採と利用が急がれているが、外国産材の普及などによって国産材の需要が低迷してしまっている。国産材の需要を拡大し、木造の建築を増やすことで、林業木材産業の成長や、地域の森林環境の改善に繋げていきたいというのが本テーマである。



目的

仮説

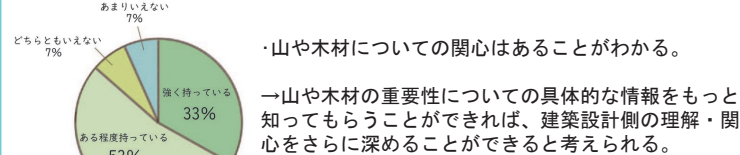
川上から川下の連携不足を解消すれば国産材利用を促進できるのではないかと

ファーストサイクルでは、森林の現状や課題を理解したり、現地調査として伐採現場、原木市場の見学を行った。調査により、川上、川中、川下で多くの課題が複雑に絡み合い、それらすべてを網羅して業界全体を理解することの難しさを痛感するとともに、川上・川中・川下の接点がないことにより、連携があまりとれていないということを知った。このことから、学生が第三者の視点から疑問に思ったことをアンケートにし、実施することでどうして連携がしにくいのかを明らかにすることを目的とした。

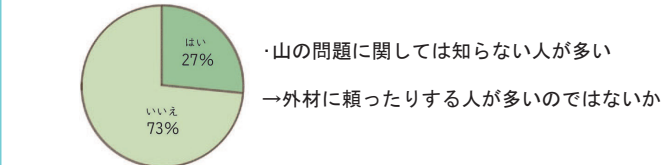
分析結果

①アンケート調査分析結果

Q.どのくらい山や木材について理解、関心を持っているか(川下側)



Q.山の抱えている問題についての情報を十分に得られているか(川下側)



- ・国産材の利用の普及に必要なものとして、木造設計のノウハウと回答した方が最も多く、それに次いで消費者に国産材利用の利点について知ってもらうことと回答した方が多かった。
- ・木造設計に対する関心があり、山や木材についても無関心ではないことがわかる。

②意見交換会を踏まえて

現在の林業は、体質的に川上から川下までの流れをしっかりと持ち、各々の仕事を行っているので、川上側は要求された木材を切るだけで、木材が建築材であるという意識が薄い
 消費者が使用されている木材に対して興味をもたない人が大多数

・林業は山で木を切ってから市場に流れ、建材として使用されるまでに多くの工程を経る産業であるため、川上～川下のそれぞれが互いのことを意識する必要性がないというのが現状であることが分かった。
 →連携不足を解消しても工程が多いため国産材の使用の促進につながることに直接的に影響を及ぼすとは考えにくいと結論付けた。

・国産材の良さを伝えることに重点を置き、国産材への関心を高めてもらうための工夫や取り組みといった、木材を使う消費者に視点を向けたアプローチの大切さを学んだ。

方法

①アンケートの実施

川上を森林組合や事業体、川中を原木市場や製材所や製品市場、川下を材木店や建設会社、建築設計者の方々とし、それぞれの立場に合わせて質問内容を変えて実施した。アンケート内容は、川中側は「木材の情報について」「交流の機会について」「国産材利用促進について」の3点についてアンケートを行なった。川下側は「木材への認識について」「木材の情報について」「山や森林について」「国産材利用について」の4点についてアンケートを行なった。

②意見交換会の実施

第1回：10月5日(火)
 参加者：30班学生
 とちぎ木づかいプランナー協会、県森林組合連合会…等に所属の方々

第2回：12月7日(火)
 参加者：30班学生
 栃木県庁林業木材産業課の方

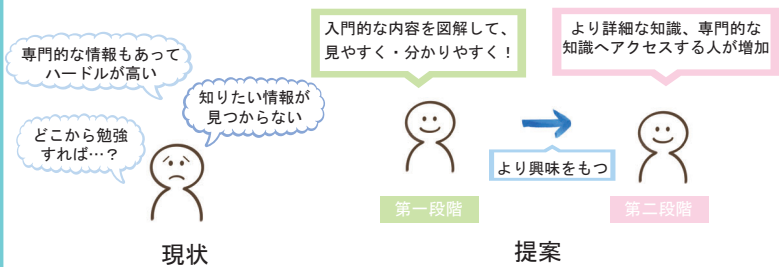
第3回：12月14日(火)
 参加者：30班学生
 茂木町副町長小崎正浩様



提案

情報の二段階アプローチ

国産材や木造建築に興味をもって調べたいと思ったとしても、分かりやすい情報から専門的な情報が混在しているのが現状である。現に私たちも、最初何から勉強したらよいか分からずとも苦労した。そこで、情報を分かりやすくまとめ、興味を持ってもらったり、もっと知りたいという気持ちを育む必要性を考えた。そして、設計する上で必要な資料やデータというような、より深い情報にたどり着く人を増やすことで、木造建築物の増加につながり、結果的に国産材の利用が促進されるのではないだろうか。



作成した図解資料

- ・日本の森林の現状①②
- ・地球温暖化防止に向けて①②
- ・木に関する豆知識

→基礎知識を分かりやすくした